

優良経営体事例



調査日	平成27年11月 平成31年1月(更新)
所在地	観音寺市大野原町
経営主	大西規夫
主要事業	露地野菜部門
主要作目	水稲11ha ネギ6ha、レタス16ha ロメインレタス13ha タマネギ1ha、ブロッコリー3ha ニンニク1ha
就農タイプ	継承
法人化	平成20年(就農後18年目)
売上	1億5,000万円
従業員	常勤9名(内役員2名) 実習生7名

ヒストリーあらすじ

・大西規夫氏は畜産(肥育牛)と露地野菜の複合経営を行っていたが、経営の効率化を目的に畜産部門を廃止し、平成17年、レタスを中心とした露地野菜農家として認定農業者となった。(小学3年生の時、父親を亡くして母親が農業経営、大西氏も小さい時から農作業を手伝う)

・その後、地域との信頼関係を築きながら順調に規模拡大を行い、平成20年には農業法人を設立し、レタスを核に青ネギ、ブロッコリー等、地域の特産野菜を組み合わせた土地利用型経営を確立し、地域でも有数の大規模経営に発展した。

・その作業体系、栽培技術、雇用管理、人材育成、地域貢献等、あらゆる面で地域農業者の目標となっている。特に地域の担い手会の世話役としても活躍している。

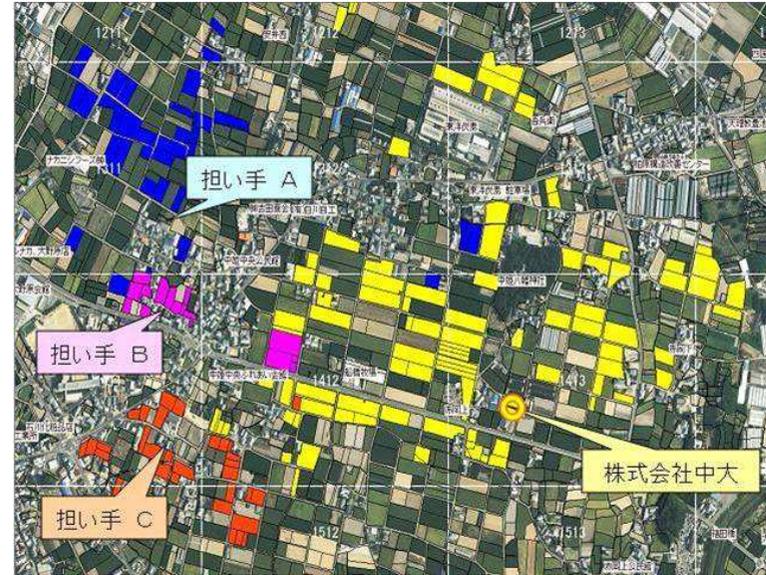
・レタスについては、産地としての有利販売に繋げようと計画出荷に配慮している。地域の農家が単価の高い時期を狙って生産するところを補完するために、単価の低い時期にあえて自社の出荷を多く配分して産地の出荷量を補うなど、歴史ある野菜産地の維持発展に大きく貢献している。

・子供時代に父親を亡くし、母親の農作業を手伝った日々、高校卒業して本格的に就農するまで、地域の人々の協力を感謝。子供心に「いつかは恩返しをしたい」の思いが農業の原点。

エッセンス	
●地域密着型農業経営の実践	・地域とともに発展する借地経営を心掛ける。 ・農地を借りて欲しいと依頼されると、半径1km以内であれば、営農条件が悪くとも全て引き受けている。遠隔地は地域の担い手に預かってもらうよう仲介している。
●従業員、実習生との全員経営	・外国人実習生の能力向上に工夫。3年間の研修期間で栽培技術とリーダーシップの習得を目標。 ・農作業もトップダウン指示でなく、全員作業を基本として全員で議論して生産性を高めている。国籍や立場で隔てずに意欲や能力を高めることを心掛けている。
●省力作業体系の確立	・専用機械と組み作業で効率的、計画的な作業を行うが、収量、品質への影響が大きい作業は、あえて機械化を避けて人で行うなど、メリハリのある作業体系を確立している。



大西夫妻(中央)とスタッフ一同



半径1km圏内の圃場は条件悪くても引き受け



スタッフ全員が笑顔で
作業できる経営方針



現場作業の全員が考え、議論、工夫
して経営を実践



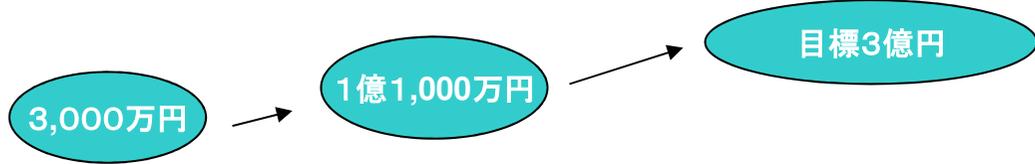
新技術(土壌消毒)や新品種にも挑戦

株式会社中大 ヒストリー

就農期 (昭和60年～平成14年)	転換期 (平成15年～19年)	確立期 (平成20年～26年)	発展・将来構想 (平成27年～)
<p>高校卒業と同時に就農 (S60)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肥育牛中心の経営 基牛導入、仕様管理技術等の工夫による効率的な経営を追求。他の肥育農家からも参考にされるなど、地域でも上位の成績を上げる経営になっていた。 堆肥の供給先として連携していた農業者とは今でも交流が続いている。 <p>妻と母親と3名で できる範囲の家族経営</p> <p>地域の担い手会 栽培技術の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若手農業者30名程度の活動 ・栽培技術の向上 <p>当初、若手6名の仲間が企画提案 会長や規約のない自由な会 毎月1回、経営や技術の勉強会</p>	<p>H15(2003年) 肉用肥育牛を縮小</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国的にBSE問題が発生 ・多額の運転資金が必要 ・経営拡大は難しいと判断 <p>レタスを中心とした 露地野菜経営に転換</p> <p>栽培の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消費者の立場に立った栽培 ・消費者に喜ばれる農産物生産 ・規模拡大しても品質維持 <p>地元の非農家の後輩 が就農相談に来る。 (H16)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業研修生として受け入れ ・雇用を入れることの難しさを実感 経営的、労働的、保険など ・インドネシア人技術研修生も受入 <p>個人で認定農業者 (H17)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の信頼をえるため、露地野菜経営を真剣に取り組む ・徐々に借地が増えてくる 	<p>H20(2008年) 農業生産法人 株式会社 中大 を設立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社名の「中大(ちゅうおう)」は地名「中姫中央」と名前の「大西」から一文字ずつ取った。 ・地域への想いを込めている <p>地域の大規模野菜農家 水田15ha 延べ作付面積 14倍に拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水稲 7ha ・ネギ、レタス、タマネギ、ブロッコリーの輪作 ・青ネギ(年3作) <p>従業員と実習生が 自ら考え、話し合い、 指導力を磨く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習生も従業員と同様の待遇 ・経営意識を持たせる ・作業の無駄や失敗、品質低下を減らす話し合いを徹底。 ・経験を積んだ実習生には現場を指示するリーダーを任せる。 <p>トップダウン方式の ワンマン経営ではなく 現場で考え、議論、工夫する 全員経営を目指している！</p>	<p>JA出荷調整作業支援施設 の高度化で産地強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・JAが新システムの出荷調整作業支援施設を整備したことにより、消費者ニーズに即した高品質なレタスの生産に向け産地一丸となり取り組む。 <p>地元小中学生の 学童農園を積極的に応援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・収穫の喜びで農業の素晴らしさを知ってもらう ・県下トップの野菜産地の誇りやあこがれ ・将来の農業の担い手に <p>地域に支えられて発展 ・農業は依然として厳しい</p> <p>若者に職業として ↓ 農業を選択してもらえる 魅力ある農業経営の確立</p>

株式会社中大 <課題と対応策>

<売上推移>



フェーズ		就農期 昭和60年～	転換期 平成15年～	確立期 平成20年～	発展・将来展望
主な出来事		●母親から就農 ●結婚 ●家族3名での農業経営	●肉用肥育牛の縮小 ●露地野菜経営に転換	●借地による規模拡大 ●優良経営体表彰(大臣賞)	
経営課題	ヒト・組織	妻、母、本人の家族労働 地域の人々の協力	研修生の受入	法人化 外国人実習生の増加	農業人口の増加 若年層の増加
	土地・設備	肥育部門の拡大	期間借地	地域内の借地	地域の遊休資産活用
	カネ	多額の運転資金		設備投資資金の調達	
	技術・ノウハウ		ビッグベイン病の蔓延	土づくりの徹底 省力作業体系、新技術の導入	異業種との交流
	販売・販路	市場、グループ販売	肉売り上げ低迷	地元JA主体の出荷	JAの販売力強化
	情報	JA、地域		自主的な勉強会	情報発信力強化
	地域		地域の信頼	担い手の育成、食育活動	従業員の独立支援
	具体的内容	・家族3人で出来る農業 ・水利慣行が複雑	・肥育牛経営の先行きが不透明 になった時期	・借地13ha(地主30人、80筆) ・	・就農希望者の雇用と独立支援 及び経営確立支援 ・情報収集力の強化
対応策		・販売に係るノウハウの修得 ・肥育技術の向上 ・野菜生産技術の試行錯誤による修得	・地主の信頼が得られるような取 組み 例: 期間借地後白垣して返す 良い品質の農産物を丁寧に 作る ・土づくりの徹底	・半径1km以内の圃値は条件悪く とも引受、責任を持って管理 ・土壌分析 ・就業規則 ・環境にやさしい技術導入 ・基本技術の見直し	・地域の新しい担い手の育成 ・新品目の導入 ・ニーズの把握
外部環境			※BSE問題の発生		